

実現可能な「地域計画」づくりのポイント

Key points for creating feasible regional plans

高橋信博

*TAKAHASHI Nobuhiro

1. はじめに

令和5年4月1日に施行された農業経営基盤強化促進法の改正により、「人・農地プラン」は「地域計画」と名称が変更された。全国の市町村では、10年後の地域農業と農業者のあるべき姿を話し合い、令和7年3月までにこの計画を策定することになった。策定された「地域計画」について、令和7年度からはその実現に向けた取り組みに移行することになる。

新たに策定した「地域計画」では、話し合いを繰り返しながら、地域ごとに納得できる内容にまとめあげることが望まれていたが、2年という短期間で満足できるものに仕上がったのか？このままの形で実現に向けて取り組んで良いのか？本当に実現できるのか？いま全国の現場から疑問の声が聞こえている。

こういう状況を想定し、山形県では4年前から実現可能な「地域計画」づくりを条件の異なる複数の現場で試してきた。この取り組みの過程と成果から、いま私たちがどう動かなければならないのか、実際の現場体験から見えてきたことを報告する。

2. 地域計画策定時の現場担当者の悩み（課題）

なぜ「地域計画」が必要なのか、実際どのような方法で計画を作っていくのか、即現場で使える方法が知りたいという要望が全国から寄せられ、北海道から九州・四国まで、数多くの研修を実施し、現場で業務に携わる担当者の悩みを訊いてきた。

既存の「人・農地プラン」をなぜ「地域計画」に変える必要があるのか？という疑問を持った担当者が大半というなか、「地域計画」の策定作業が始まった。

なぜそのような疑問が発生するのか、それは現行の「人・農地プラン」は誰が作ったものなのか？に起因する。当時「人・農地プラン」は地域の農家が中心となり、話し合いによって作成されたはずだが、本当にそういう方法で作られたのか、行政側がお膳立てした「人・農地プラン」がそのまま地域で計画を作ったという形になっていなかったのか？ということだ。現場で「人・農地プラン」のことを知っている農家は本当に少ない。そもそも自分たちが作った計画だと認識している農家はいるのか？これが実際の現場で起こっている現実だ。

こういう現状のなかで担当者は、関係者に「地域計画」の必要性をどう説明したら良いのか、どうしたら自分事として受け取ってもらえるのか、話し合いの場など持てるのか、みんな悩んでいるのだ。

*農村づくりプロデューサー Agrarian and rural area development producer

キーワード：地域計画、話し合い、山形県

3. 山形県で行ってきた取り組み

まずは、担当者自身が取り組みの必要性を認識すること。併せて地域から理解を得るまで、丁寧な（熱のこもった）説明を行うことだ。そのためには、技術支援と現場における後方支援が重要だと考えていた。技術的な面では、それを習得する人材育成を短期間で行うのは難しいが、手厚い後方支援があれば、ある程度安心した環境で取り組みが進められると判断した。

山形県が以前から実施してきた、地域づくりや話し合いを進めるための人材育成研修はそのままの形で継続し、これに加えて山形県農業会議で「地域計画」に特化した話し合いの手法を伝えるための研修に取り組んだ。また、県・市町村・土地改良区・農業会議が連携して、平野部から中山間地域など条件の異なる現場を複数選定し、実際に話し合いを通じた「地域計画」と「営農計画」づくりを先行して実践してきた。

この取り組みでは、平野部と中山間地域において同じ手法で話し合いと成果が得られるのか、地域計画と営農計画を実現させるために必要なことは何か、単独で実践不可能な地域がどうしたら持続可能となるか、農地整備事業の計画と地域計画を同時に実施できるか、についても検証してきた。

この成果を「地域計画策定に向けた話し合いの進め方」としてマニュアル化し発刊し関係機関に配布している。このマニュアルは山形県農業会議のホームページから、誰でもダウンロード可能である。



4. おわりに

地域計画を実現するためには、関係する人々が、どれだけ自分事として捉え、自分事として考え、自分事として行動できるかが鍵だということはハッキリした。絵に描いた餅では空腹は満たされない。満足するためには、「〇〇になれば良い」「〇〇にした」と自らの声として発する、出したくなる環境づくりがいかに重要かということだ。「地域計画」はその現場の声をまとめたもの、まとめられた声の一つひとつ実現していくことで満足が得られるという形が理想の形だ。

今回関わった事例では、どの地域においても想定した以上の成果が生まれている。そのポイントは、現役世代だけに任せていてはダメだという、次代の担い手と女性の存在と参画だった。そのための地道な下拵えの部分が、どれだけ重要なのか？それが結果として現れたものと捉えている。